

=====

GCOE NewsLetter  
[No.13 2008/10/22]

-----

ジャック・ダララン博士の講義と講演会について  
「テキスト布置解釈学原論」（集中）の追加講義について  
gCOE東京フォーラムの開催について  
次回のオープンレクチャーについて  
平成20年度第1回グローバルCOE論文賞の結果および講評  
平成20年度第2回大学院生海外派遣事業の選考結果について  
平成20年度海外派遣大学院生調査報告  
第12回オープンレクチャーの要約  
gCOEスタッフ海外出張報告

=====

---

■ ジャック・ダララン博士の講義と講演会について

---

gCOEでは、来る11月に元国立テキスト史研究センターの所長で、現在、フランス政府研究庁主任研究員のジャック・ダララン博士を招聘し、講義と講演をご担当いただくこととなりました。ダララン博士の略歴や業績についてはgCOEのWebページで紹介しています。

下記の日程で講演会が開催されます。また講義については「テキスト布置解釈学原論」（集中）の追加講義として行われますので、次項をご覧ください。

【ジャック・ダララン博士 gCOE講演会】（使用言語・英語）  
2008年11月5日(水) 午後6時～ 名古屋国際センター内GCOEオフィス  
「歴史史料としてのバイユーの綴れ織り」

2008年11月27日(木) 午後2時30分～ 名古屋大学文学研究科大会議室  
「アッシジの聖フランチェスコと聖女クララの関係に見る男／女関係」

---

■ 「テキスト布置解釈学原論」（集中）の追加講義について

---

下記の日程で、ジャック・ダララン博士の講義が行われます。これらは「テキスト布置解釈学原論」（集中）の追加講義となりますので、松澤和宏先生の原論（集中）の受講生は、こちらをあわせて受講して下さい。

【ジャック・ダララン博士 「テキスト布置解釈学原論」追加講義】（使用言語：英語）

2008年11月12日(水) 4限 文系共同館2B

「グレゴリウス改革期における隠修士ロベール・ダルブリッセルと修道女の生活」

2008年11月13日(木) 3限 文系共同館2B

「アベラールとエロイズ往復書簡についての考察」

2008年11月17日(月) 4限 名古屋大学文学研究科大会議室

「アッシジの聖フランチェスコの自筆にもとづく母性統治についての考察」

2008年11月18日(火) 4限 名古屋大学文学研究科大会議室

「ウンブリア伝説：アッシジの聖フランチェスコ新伝説」

---

#### ■ gCOE東京フォーラムの開催について

---

名古屋大学は、「新しい時代を切り開く人材の育成を目指して—名古屋大学が育てる勇気ある知識人—」をテーマに東京・学術総合センターにて平成20年11月7日(金)12時～17時の日程で第6回名古屋大学東京フォーラムを開催します。

当日は、14時15分からの報告セッションにおいて山本理事に続いて、本プログラム拠点リーダーの佐藤教授が「グローバルCOE拠点における人材育成」をテーマにスピーチを行う予定になっています。

東京フォーラムは文部科学省および名古屋大学全学同窓会の後援で開催され、名古屋大学の研究の現状を広く一般に公開する目的で毎年開催されています。本プログラムからも、佐藤教授のスピーチに加えて、会場でのパネル展示を行う予定になっています。

詳しくは、名古屋大学のWeb ([www.nagoya-u.ac.jp/info/tokyo\\_forum/index.html](http://www.nagoya-u.ac.jp/info/tokyo_forum/index.html)) をご覧ください。

---

#### ■ 次回のオープンレクチャーについて

---

2008年11月12日(水) 18:00～ 名古屋国際センタービル15F GCOEオフィス

講演者：イヴァン・ルクレール（フランス・ルアン大学教授）

題目：「なぜ私たちはみなフローベール研究者なのか？」

<通訳付き>

---

#### ■ 平成20年度第1回グローバルCOE論文賞の結果および講評

---

グローバルCOE論文賞へのご応募ありがとうございました。

厳正なる審査の結果、次の論文を顕彰することに決定致しました。

深津周太『狂言テキストにおける感動詞「シシ申」の歴史的研究』

講評

釘貫 亨（gCOE教育担当サブリーダー）

今回応募があった論文はいずれも水準の高い力作が揃っているとの認識を得たが、慎重な検討の結果、論文賞として深津周太氏の「狂言テキストにおける感動詞「シシ申」の歴史的研究」（日本語学）を選考した。その経過と理由について以下報告する。

深津氏の論文は、中世後期の日本語感動詞「シシ申」が「ナウナウ」「申々」とともに「初対面の相手への挨拶的呼びかけ」として機能の差異を保ちつつ共存しながら形態音韻論的要因によって内部的再編成が行われたことを、異なった時期に成立した二群の狂言テキストを分析することによって論証したものである。従来、感動詞はその性格上品詞分類における「継子」扱いされ、個別的な観察対象ではあっても構文構造と関連して考察されることがなかった。深津氏の論文は、この点に切り込んだもので感動詞の歴史的成立と編成過程を構文構造の観点から捉えるという従来に無い視点が高く評価された。いちいちの用例に対する読みも深く、考証が丹念である。

以上が深津氏の受賞理由であるが、最後に応募論文全体を通して見た印象を述べれば、より高度な外国語表現力を身につけて、多様な事実の中から簡潔にして本質的な認識を導く鋭い直観力を養成することが大いなる飛躍につながると期待される。

---

#### ■ 平成20年度第2回大学院生海外派遣事業の選考結果について

---

選考の結果、下記の二名の採用が決定しました。

・笠井俊和（西洋史学）〔派遣先：イギリス・国立公文書館〕

「17・18世紀における北米植民地の船乗りと西インド貿易 —海事局船舶簿から探る貿易と密貿易—」

・福岡麻子（ドイツ文学）〔派遣先：オーストリア・ウィーン大学〕

「エルフリーデ・イエリネク初期作品における言語の複数性の意義」

---

#### ■ 平成20年度海外派遣大学院生調査報告

---

森田剛光さん（文化人類学）の調査報告を下記に掲載します。

「祭りファーローを取り巻く様々なテキストの調査研究」

2008年8月から約2ヶ月間、主に西北ネパール、カリガンダキ溪谷地域、タッコラ地方に滞在し、商業民族タカリーの祭りファーローの研究調査を行った。ファーローは、起源伝承の再現と土地の女神との結びつきを確認する各種儀礼で構成され、チベット、インド両文明圏の境域を故郷とするタカリーの民族形成に重要な役割を果たしてきた。しかし近年、移住地域の拡大とタカリー語話者の減少、成員の高齢化が進み継続が危うい。各儀礼のもつ意味、正確な手順は、ラマ僧父子二人のみに継承されているにすぎない。今回、ラマ僧父子の依頼を受け、ファーローに関する古文書、教典の撮影を行った。加えて、過去二年間に撮りためた写真、DVDを見てもらい、儀礼の変化を検証した。本年の祭りの開催中は、各儀礼をHDVカメラで撮影することに専念した。また譲り受けたファーローに関する古い歌の覚え書きをデジタルデータ化した。撮影した写真は全日程で3000枚を越え、ビデオは15本を数える。今後は、古文書、教典などの文書テキストの翻訳を進めつつ、映像テキストを通して、儀礼テキスト空間の比較検討を行い、タカリーの宗教的、儀礼的体系を明らかにし、祭りファーローに関するテキスト布置構造の全貌を考察していきたい。

---

#### ■ 第12回オープンレクチャーの要約

---

2008年10月15日(水) 18時～19時 名古屋国際センター15F gCOEオフィス

クレール・フォヴェルグ外国人教師（文学研究科・フランス文学）

題目：「ディドロと18世紀における解釈」

18世紀においてディドロとダランベールが編集した『百科全書』は、知識の提示を目的としていた。『百科全書』は、歴史を材料にして、自然界を構成する存在のつながり（連結）と人間に作用する事物のつながりを示す。また、そのことによって知識の体系そのものにおけるつながりを示している。つまり観念に関する自然の秩序を想定することにより、観念の秩序に準拠した解釈が結果としてもたらす知識を提示するのである。『百科全書』における解釈の定義によると、思考の作用自体が解釈であるとも言える。特に事実からは確認することのできない体系的な知識の場合、解釈はその体系特有の象徴と概念に思考の自然の秩序を与える。こうして『百科全書』が行った解釈の結果、知識の歴史と進歩が正確に評価されることになる。一方、知識がバラバラの形で存在する18世紀の思想状況から見れば、『百科全書』による解釈は、知識のつながりを認識させるという特徴もある。ディドロの著書である『自然の解釈に関する思索』によれば、自然学に限らず自然という概念が関わっているどんな学問に対しても自然の解釈が応用できる。現世界を解き明かそう

とすることは、自然を模倣したプロセスに従って現象と現象が含む可能性の連続性を確認した上、自然の法則を推測することなのだ。すなわち解釈による可能性を、来るべき世界を含めて、推測することなのである。ライプニッツとデイドロの哲学においては、それぞれ、知覚も知覚から得た知識も象徴による知識である。知覚は記号による連結を作り出すのである。ところが、その知識は記号化によっても概念化によっても完全に分析できない知識である。そのため知識は解釈を必要とする。デイドロと18世紀における解釈は、自然現象と知識の象徴の間の類似を一切想定しないという特徴があるからである。

---

## ■ gCOEスタッフ海外出張報告

---

ゼーン・ゴベル (gCOE推進担当者・言語学)

はじめに、私が客員研究員としてオーストラリア、タウンズヴィルのジェームズ・クック大学(JCU)人文・社会学部に招聘されるに際し、ご助力下さったグローバルCOEプログラム及び文学研究科のメンバーに感謝申し上げたい。今回の訪問は、8月5日のオーストラリア到着の少し後から、2008年9月28日(日)の帰国までの間であった。滞在の間、私は3つの主要な活動に携わった。その一つは、自らの研究について人類学の学生たちに講義することである。講義の題目は「インドネシア都市部の過渡的背景の下での共同体の形成」であった。活動の2つめは、自著の第6章の完成であり、作業は上述の講義を行う中で、またJCU図書館の特に移住者の人類学についての文献を利用することで進捗した。第6章が書き上がったため、7章に取り組み始めたところである。3つめの仕事は、COE研究集会『テキスト解釈の中に人間のアイデンティティを探る』のプロシーディングズの編集である。この編集作業は、マイケル・オトゥール教授(マドック大学)、重見晋也准教授、及び宋蔚氏と協同で行われた。既に9篇の論文の編集が終わり、目下、残り4篇の論文の最終稿と、天野教授と親交のあったオーストラリアの研究者たちからの追悼文を待つところで、あと数週のうちに全てが手元に集まるかと思う。JCUで過ごした間、私は週一度の学部職員会と研究計画セミナーにも定期的に出席した。運営の仕事を引き受け、自らの科研費による研究計画を分析したことに加え、私はオーストラリア国立の諮問委員会のメンバーとなって、オーストラリア政府後援の地域大学インドネシア語新構想(RUILI)の一部として発展した新たなインドネシア語カリキュラムの評価を行うよう依頼された。

次回のメール版NewsLetterの発行は2008年11月中旬を予定しています。

.....

GCOE「テキスト布置の解釈学的研究と教育」

Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration  
<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/>

---

NewsLetter No.13

発行：GCOE編集部

編集担当：鎌田隆行

Copyright(C) 2008 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS

• .....

---

..... •